

地藏尊の宗教

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

④



白杵磨崖仏の一つ「地藏菩薩及十王像」(国宝・大分県白杵市)
※雨の日など、湿気のある日は色が濃く出ます
写真提供:「国宝白杵石仏ボランティアガイド 都留清仁」

十王思想と地藏尊

優しい人とはどういう人か。他人の過ちにも目をつぶる、常に怒らない人であろうか。いつにもこやかで決して叱らない人であろうか。子供がこうした人を好むのは間違いないが、子供の躾や教育に携わった人であれば、その弊害も知っている。甘やかしかつ放任がもたらす悪い結果である。反対に徹底的に厳しく、時には鉄拳制裁も辞さないような指導は嫌われるし、ことに現代では体罰は否定される傾向にある。とすると叱らない人は優しく、厳しい人は優しくないのだから。

もつても悪行をくじいて善に導くことをいう。前者が叱らない教育とすれば、後者は体罰をも含めた厳格な指導である。愛を説くキリスト教においても、摂受に通ずる厳しさを見出すことができる。『旧約聖書』の「箴言」には、「鞭を控える者はその子を増やす者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる」とか、「鞭を控える者は自分の子を憎む者。子を愛する人は熱心に諭しを与える」などとして、子を愛すればこそその体罰が説かれてい。いわゆる愛の鞭、タフラブ(厳しき愛)である。

容なき教育の復活によって本来の活気を恢復したという(加藤十八「アメリカの事例から学ぶ学校再生の決めた」)。日本でも行き過ぎたゆとり教育や叱らない学級経営の失敗に対し、安倍内閣の教育再生会議は学校の指導を厳しくするようした。寛容か体罰かに関しては諸説あり、政治的立場や時代によっても見解が変わる。そのうえ指導される相手の個性や年齢、時宜によっても変わるから、教育はまさに仏教のいう応病与薬でなければならぬ。いずれにしても、両極端が適切であるはずはない。筆者自身は小学校時代のお二方の担任の先生に厳しい体罰をも受けたが、今なおそれは自身の精神的財産となっている(拙稿「師の恩・伝統的教育の復権を目指して」『法光』No.二五八、臨済会)。その理由は摂受と折伏のバランスが適確で、背後に愛情、慈悲があつ

紅葉に感謝し平安を祈る

シャンソン歌手 友納あけみ

昨年の秋のことでした。急な寒さに色付きだしました街路樹達。町中が秋色に染まりました。我が町、豊洲の駅の中にある小さなスペースに、まるで大きな鉢植えの様に、五本の木が植えられています。直径一メートル程の円形の土が見えるだけ、あとはコンクリートに囲まれて。でも、そんな環境の中で今年も鮮やかな煉瓦色の紅葉を見せてくれました。

見るに巻きつけられていました。そういえば、年末になるとクリスマスイルミネーションがキラキラしていました。その準備か…?



見上げればビルの谷間の小さな空しか見えません。数時間しか太陽を浴びることを許されないコンクリートのジャングルの中で、今年もこんなに鮮やかな紅葉を。うーん健気！ありがと！毎年感動しています。ふと、よく見ると何か針金のようなものが、ぐ

折角、紅葉を迎えた木々に、こんなに巻きつけて、おまけに電球をつけて、大丈夫なのかなあ？何だか可哀想。イルミネーションは好きだったけど、この頃は余りにもたくさんで！エネルギーの問題も、どこ吹く風！ちよと複雑な気分。

世界中を見渡せば、

それぞれの利便性や合理性の理屈を楯に、そして欲望のまま。傍若無人に人間は生きていて。その権化のような人達が世界を動かしています。

みんな自分達の利益と理屈を振り回して。やっぱりどこか間違っているのかも知れません。どんなに科学が進んでも、あの木、あの枝、あの葉っぱひとつ、人間は創ることもできないのですから。

こんなに我が物顔で傲慢になつてしまつて、良いわけがない気がします。とは言ふものの、ヌクヌクと快適を貪り、この都会での生活にすっかり甘んじてしまつている我が身を思うと、何も言えません。この小さな星地球は何処に向かつていくのかなあ？この変わりゆく街、豊洲を眺めつつ、ひっそりとこの秋に、紅葉に、そして今日一日に感謝し、平安を祈るばかりです。

たからと確信している。

摂受と折伏を尊格の美術的表現に当てはめると、寂靜形と忿怒形となる。観音菩薩や地藏尊は寂靜形であり、不動尊や閻魔王は忿怒形である。日本仏教では地藏尊と閻魔王が本来は一体であると信ぜられるようになったが、それは摂受と忿怒の不可分、また慈悲には厳しさも必要であることを示している。

地藏閻魔の一体説は、唐で作られたとされる『閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土経』に説かれた十王思想を基礎としている。十王とは、冥府、すなわち地獄に住する十人の裁判官で、人の死後、一人ずつの王が四十九日までは七日ごとに計七人現れ、その後百日目、一周年、三周年まで現れて亡者の審判をする。現代日本の裁判は三審制であるがこの思想によれば十審制と考えたい。十王思想は仏教・道教やベルシャのマニ教の

地獄観が複雑に習合して

できあがったもので(澤田瑞穂「地獄変」)、十王すべての来歴を明らかにするのは困難だが、明らかに仏教系の名を持つ王がいる。それが死後三十五日目に現れる閻羅王、すなわち閻魔である。

やがて地藏尊は、十王が支配する冥界に「招かれもしないのに入り込み、冥律を無視して罪人を赦したり出獄させたりする」ようになる(同書)。上述の言葉を当てはめれば、ここに折伏の冥府の王たちと、摂受の地藏尊が共存するに至つたのである。これにもつき唐代以降、地藏尊を中心にして周りに十王を配した「地藏十王図」が描かれるようになり、それは鎌倉時代頃から日本にもたらされて白杵の磨崖仏として彫られたりした。しかし、それらはまだ地藏尊と閻魔王は別体であった。両者が一体となるのはその次の段階を俟たねばならない。